

## 宮本久雄師のこと

大森 正樹

私が宮本さんと知り合ったのはそう古いことではない。私自身通算すると割と長い学生生活を送ったが、その最後の頃であったか、東京大学を出て、司祭になるべくカナダに渡った人がいるというようなことを確か、故長倉久子さんから聞いたように思う。それは高森の草庵に居を構えたドミニコ会司祭、故押田成人師に多大の感化を受けてのこととも聞いた。当時はそのような人もいるのかと半ば感心して聞いた。

後、私が一九八四年から在外研究ができるという見通しが立った頃、フランスに行つて勉強してみたいと思つていたので、どこで勉強できるかをどなたかに尋ねたいと思つていたら、宮本さんがいいという人がいて、さっそく手紙を出した。すると返事が来て、いくつかの参考になることを教えてもらった。私は結局フランスには行かず、イタ

リアはローマに行ったが、一九八六年に帰国するとヴァイミール・ロースキイの『Essai sur la théologie mystique de l'Église d'Orient (1944)』の翻訳が東京大学の宮本さんによつてなされたということを南山大学のマルクス先生から伺った。それはマルクス先生自身、翻訳をしようと思つて学生たちと読み始めていたら宮本さんが出版されたということである。そのプロジェクトは終わりにしたということであった。宮本さんはこの書名を『キリスト教東方の神秘思想』としておられるが、「la théologie mystique」を「神秘思想」とされたのはよくよく考慮された上のことと思う。この語の意味は直訳的には「神秘(的) 神学」ということになるが、そうなるのと東方教会神学の中の「神秘」的な領域を扱うものだという印象を与えることになつてしまいかねず、あるいは東方神学そのものがなにか神秘的なものというふうにとられてしまうかもしれないからである。しかしまたこれは「la pensée mystique」と書かれていないので、それが「思想」になるとどうなるのだろうかと本筋ではないことも色々考えさせられたが、この翻訳は私も大いに参考にさせてもらったし、これが日本語に移し変えられたことは、これから東方神学なるものを勉強しようとする学徒や真剣

な信徒にとつては本当に大きな援けであり、今後の研究の道標であった。

ところでこの翻訳を皮切りにその後の宮本さんの仕事にはまったく目を見張るものがある。矢継ぎ早に論文を発表し、それが次々と単行本になっていった。私なぞはその一冊読み終わらないうちに新しい本を手にするということになった。これはもう驚嘆としかいうほかない。とにかく会えばいつもゲラを抱えておられたように思う。そのような努力の果てに生み出された『教父と愛智』をはじめとする書物は私の書棚にも場所をしっかりと占めている。

また宮本さんの仕事の及ぶ範囲は多岐にわたる。著作や翻訳を総合しても多方面にわたって気配りがなされている。それは大雑把に言つて、聖書関係(旧約と新約)、哲学あるいは存在論にまつわるもの、他者論、言語論、公共哲学、イエスに関するもの、東方キリスト教靈性に関するもの、現代的諸問題への警鐘となるもの、等ではないかと思われる。もちろんこうした内容は司祭だから扱つて当然という分野もあるが、しかしそれを司牧的観点にのっとりつつ、学問的視点で包括していくところは宮本さんならではのところであろう。こうした著作の二々について私は

論評する資格を持たないが、宮本さんが世に問うた仕事を一つ取り上げるとすれば、それは「エヒイエロギア(脱在論)」という思想であろう。周知のようにかつて有賀鐵太郎博士がヘブライ思想の中核を「ハヤトロギア」という言葉で提唱し、西欧には見られない躍動的な神の根源的力や働きに生かされる人間の姿を(ある意味総括的に)描き出したが、宮本さんはその有賀博士が指摘した、このヘブライ語の「ハヤー」という完了態三人称にとどまることなく、さらに「エヒイエ」という未完了態の一人称をわれわれに思い起こさせることによつて、一般的に、また自己満足的に完了して終結してしまう神の力・働きではなく、常に神が主体的に人間・被造物へ働きかけるものだということを開示したのであった。そしてそれは単に神が常に働きだけではなく、「共に在るだろう」、つまりわれわれ人間と、常に、共に在ることを(出エジプトではモーセ個人に神が語りかけているとしても、その言葉の射程には全人類が入る)、そしてある意味神という殻に閉じこもることなく、己を超出していくこと、そしてその先に人間も神の意図に従つて協働していくことが示唆されているのである。この「常に」や「共に」また「協働」というところに他者への

関心や配慮が見られる。つまりややもすれば自己という殻に閉じこもり、自閉の様態に陥っていくわれわれ人間の狭隘な視線を自己の外に向け、他者を志向しつつ、私の思维の枠を押し広げようとするのである。ここに宮本さんの他者論の基底があると考ええる。

また宮本さんは「宮澤賢治」についても論をものしている。いつか私が授業で賢治を取り上げていることを聞いて、何か参考になるものを教えてほしいと言われ、私は通り一遍のものしか提示できなかったけれど、宮本さんはそれを自分の視点から深められた。また水俣病関連で石牟礼道子氏にも関心を持たれ、九州まで出かけてインタヴューし、やはり他者論を踏まえて論を展開された。アウシユヴィッツについては言うまでもない。かけがえのない他者としての人間への不当な扱いには、アカデミズムの奥に留まっ、座視することには黙っていられなかつたのである。

またあるとき今、「聖霊」について考え、それを書こうと思うと言われたことがある。私は自分の関心で、ヘシカズム論争における東西教会の聖霊発出解釈にまつわる教義的なことだけを考えていたが、その後程なくして上梓された『他者の風来』を見ると、そこにはこのような意味

姑息的なものではなく、旧約（ルーアッハ）と新約（ペネウマ）から霊の根源的姿を描き出そうとしているのが見られる。この霊は「神とキリストの気・霊」であり、「生命的エネルギー」であつて人をして神に結びつけ、ひいては人と人を結びつけるとされ、ここにも他者への視点がしっかりと据えられている。そして最終的には霊の働きが東アジアにおいてどういう形を取るか、にまで論が及び、そして特にわが国の三・一災厄とどう結びつくのかが詳述された。ここにおいて宮本さんは西欧移入のキリスト教ではなく、アジアの風土に根ざしていくべきキリスト教を模索しているのだと知った（宮澤賢治も石牟礼道子もその線上にある）。それは西洋の東側に関心を注ぐ自分にとつても、視野の拡大を要請するものと映つたのである。

しかし個人的なことで私にとつて一番重要なことは東方キリスト教会をともに作つたことと『フィロカリア』の翻訳事業である。この二つについては九州大学名誉教授の谷隆一郎さんと三人でやったことだが、とにかく期せずして同年生まれの三人が、それぞれの関心の内容は異なるとはいへ、同じ方向を目指していたということが不思議で

あった。その切っ掛けは名古屋のカトリック出版社の新社社主、中山訓男氏と知り合い、氏もわれわれと一歳違いの同年代だが、やはり東方キリスト教に関心を持ち、その方面の本を出版したいという意向を持っておられたことにある。そこでまず何か研究雑誌を出してみてもどうだろうかということになり、とりあえず名前だけ「東方キリスト教研究会」と銘打って、研究会を立ち上げ、その機関誌「エイコーン」(現在第44号まで)を出してもらうことにした。われわれ三人はとにかくこの雑誌の充実のため、様々な方に原稿を依頼し、また自分たちも投稿して形を作っていた。宮本さんはこれにも本当に力を注いでくれた。それが日の目を見て、二〇〇一年に「東方キリスト教会」を発足させることができたのである。そしてこの学会がある程度形を成してきたとき、『フィロアカリア』を翻訳しようと言いだしたのが、宮本さんである。

このような場合もそうであるが、宮本さんは色々な人に声をかけて、この雑誌に執筆してくれる人や学会に入会する人を積極的に集めてくれた。その意味、宮本さんは行動の人であると思う。労は厭わないのだ。この行動の人は、学生のころ五島列島に行つて、そこで、隠れキリシタン

の子孫のところに滞在し、彼らの言う「結婚式」(叙階式)に与つたというめつたにできない経験をしたこともあったようだ。目的があれば、千里を遠しとせず、出かけていく。そこに漂白の托鉢・説教修道会であるドミニコ会士の面目躍如といったところがある。

従つて企画する力も私なぞにはないものである。私をはじめ多くの人がその企画に駆り出されたものだ(下働きのな役目の人は大変だったろうが)。ために私も色々仕事をやらせてもらった。そのおかげで日本では影に隠れてしまいがちなものが、人の目につくようになった。それは宮本さんの大きな功績である。

また聞いたところでは幼いときに病気を患い、療養し、成人してからも外国で入院するようなことが多々あったそう。そういう辛い経験が人間味を増したと言えるだろう。人間力が備わつたと言えるだろう。それに話をするといつても話題が豊富である。また面白い。たとえば私が話を切り出しても、最終的には宮本さんの話にみんな引きずりこまれていく。一度我が家に来られたときなど、家内を相手に家庭問題にもつこんだ話をし、どこでそういう経験をしたのかわからないが、ちゃんとアドヴァイスを与えていた

から驚きである。独り者の神父なのであるが。

宮本さん、われわれももう古希になろうとしていますね。どうです。これからは花鳥風月を愛でる生活にでも切り替えませんか？ え、何？ そんなことはもうずっと前からしているって。自分の本をちゃんと読めばわかるって。じゃ、そろそろ七〇の手習いで、パソコンでもやってみたら。「……」。

ご健勝にて。